

国際バカロレアの中等課程プログラム（MYP）における体育科の特徴と展開

岩田昌太郎・前田 一篤¹

(2012年10月2日受理)

Characteristic and Development of Physical Education in the Middle Years Programme of the International Baccalaureate

Shotaro Iwata and Kazuma Maeda¹

Abstract: The purpose of this paper is to describe the characteristics and development of physical education in the programmes of the international baccalaureate (IB), especially in middle years programme (MYP) out of three IB programmes.

MYP offers courses which combine eight subjects with five “areas of interaction” based on three fundamental concepts. As a part of the subjects, MYP physical education does not just let students participate in sports and games. The primary aim of MYP physical education is to encourage the development of “intelligence performer” and to encourage students to understand the importance of a balanced healthy lifestyle.

Although the aims of MYP physical education seem to have in common with those of physical education in Japan, it is not easy to find a consistency in curriculum and assessment between Course of Study in Japan and MYP physical education.

Key words: international baccalaureate, middle years programme, physical education

キーワード：国際バカロレア、中等課程プログラム、体育

1. はじめに

世界では、様々な分野でグローバル化が進み、加速度的に進展している。その中でも、教育は、人々が社会の中でよりよく生き、自己実現を図るためのものであるとともに、社会においてその人材が活躍し、その力が最大限に発揮されるためのものである（文部科学省、2011）。このため、時代の流れとともに変化する社会に合わせ、教育自体も進化したもとなる必要がある。そのような中、現代というグローバル社会において、日本人がグローバルに対応できる力を持つグローバル人材^{注1)}になることが求められている。

しかしながら、近年、海外留学する日本人学生が減っ

ていること、あるいは海外勤務を望まない若手社員が増えていることなどを理由として、日本の若者のいわゆる「内向き志向」の問題視がしばしば指摘されている（文部科学省、2011；毎日新聞、2012.6.19）。

そのような若者の「内向き志向」の打開策の1つとして最近話題になっているのが、国際バカロレア（International Baccalaureate；以下、IBと略記）の取り組みである。IBは、インターナショナルスクールの卒業生に、国際的に認められる大学入学資格を与え、大学進学へのルートを確保するとともに、学生の柔軟な知性の育成と、国際理解教育の促進に資することを目的としている。

また、IBのカリキュラムは、思考力・判断力・表現力等の育成をはじめ学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、日本再生戦略（平成24年7月31日閣議

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

決定)が掲げる「課題発見・解決能力」や「論理的思考力」,「コミュニケーション能力」等の重要な知識や能力の確実な習得に貢献するものである。

そこで本稿では、IB の中等課程プログラムにおける体育の特徴とその展開について、その一端を明らかにすることを目的とする。また、そのために、IB やカリキュラムの概要、IB の3つのプログラム、とりわけ中等課程プログラムにおける体育に焦点をあてて概説する。そして、最後に、日本の体育カリキュラムとの比較検討について若干の考察を加える。

2. 国際バカロレア機構とその概要

国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization ; 以下、IBO と略記) は、1968年にスイス教育財団によって設立された非営利団体である。IBO は、スイスのジュネーブに本部を置き、認定校に対する共通カリキュラムの作成や国際バカロレア試験の実施及び国際バカロレア資格の授与などを行っている。

そのような IB の発端を構想したのは、ジュネーブ国際学校の教師たちであった (相原ら、2007, pp.54-55)。それは、インターナショナルスクールの教員の共通した悩み、すなわち世界共通の大学受験資格が存在しないことによって、高校生活の後半が、進学先の国の大学受験資格を取得するために、進学先の国別にクラス編成が行われ、非インターナショナルな状況を敢えて作り出す必要があった (星野、2010)。

次に、IBO の理念は、以下の3点が掲げられている。

- 1) IBO は、異なる文化の理解と尊重を通じ、より望ましい世界かつ平和的な世界を作り出すこ

とに貢献しうる探求心、知性、そして寛容の精神ある若者を育てることを目標とする。

- 2) この目的のために、IBO は、学校、政府、国際機関と協力し専門的な国際教育プログラムの開発と厳密な評価の開発を行う。
- 3) これらのプログラムは、異なる人々に対する理解力を持ち、主体的で共感を抱くことができ、生涯にわたって学習しうる者になりうるような世界中の生徒に働きかけるものである。

このような理念のもと、IBO は、図1のような学習者を育てることの目標を設定している。そして、図1に示しているように、探究する人 (Inquirers)、知識のある人 (Knowledgeable)、考える人 (Thinkers)、コミュニケーションができる人 (Communicators)、信念のある人 (Principled)、心を開く人 (Open-minded)、思いやりのある人 (Caring)、挑戦する人 (Risk-takers)、バランスのとれた人 (Balanced)、振り返りができる人 (Reflective) の10項目の学習者像を提案している。

3. 国際バカロレアのカリキュラム

IB は、2012年6月現在、世界142ヶ国・地域の約3440校が導入している (文部科学省、2012)。しかも、わが国においても24校が導入しており、大学入学資格取得に必要な教育課程としての IB は、これからさらに国内で導入される兆しの報道を目にする (e.g. 毎日新聞、2012.6.19)。

先述した通り、IB は「全世界で共通するカリキュラムを提供しており、その卒業試験 (統一試験) に合

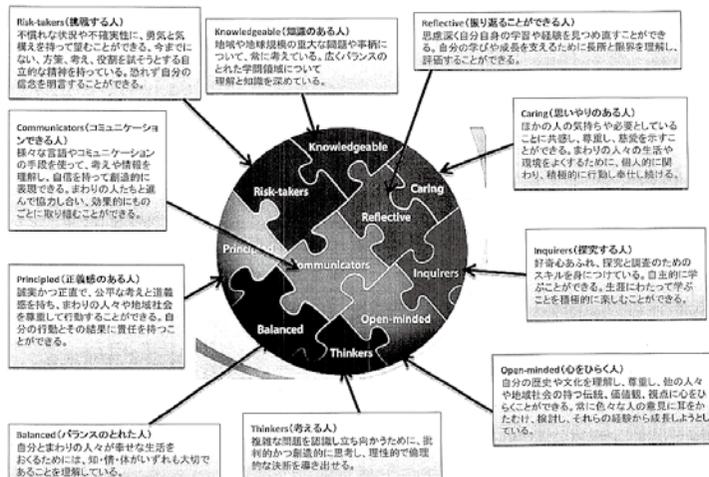


図1 IBを学ぶ人の学習者像 (IB learner profile) (文部科学省、2012)

格して得られる、国際バカロレア資格は国際的に高く評価され、世界の多くの大学で入学資格として認められている」(小池, 2009)。また、IBのニーズについて相原ら(2007)は、2つのニーズがあったことを以下のように述べている。

「第一にアメリカのSAT (School Aptitude Test)、フランスのバカロレア (baccalaureat)、イギリスのGCE (General Certificate of Education)、ドイツのアビトゥア (abtur)、スイスのマトゥリエ (maturie) といった各国ごとの大学試験資格準備のための生徒のニーズを個別に対応するための経費負担を減らすという学校経営上の問題。第二に、国ごとの大学制度への対応のための国際学校の理念や教育実践上の矛盾といった問題から生じた。」

そのIBのプログラムは、IBOによって3歳~19歳までの子どもの年齢に応じて3つのプログラムから構成されている。図2は、その3つのプログラムを示している。

第1に、3歳~12歳の児童・生徒を対象とした「初等課程プログラム」(Primary Years Programme: 以下、PYPと略記)、第2に11歳~16歳の生徒を対象とした「中等課程プログラム」(Middle Years Programme: 以下、MYPと略記)、そして第3に16歳~19歳の生徒を対象とした「ディプロマ・プログラム」(Diploma Programme: 以下、DPと略記)^{注2)}である。

本稿では、その3つのプログラムのうち、MYPに焦点をあてて紹介することとする。それでは次節で、MYPの基本概念とカリキュラムの特徴について述べる。

4. MYPの基本概念とカリキュラムの特徴

MYPは、11歳~16歳までを対象としており、青少

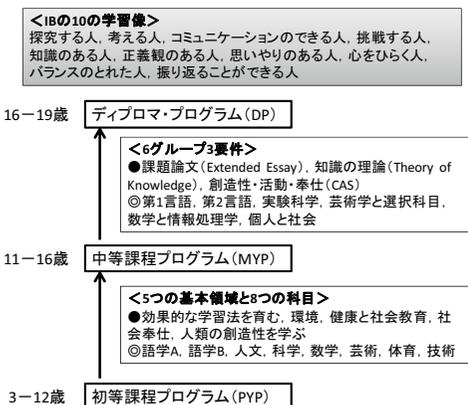


図2 IBの3つのプログラム

(筆者が相良ら(2007, p.21)をもとに改変)

年に、PYP後の学習と社会のつながりを学ばせるプログラムである(Physical Education Guide, 2010)。

MYPの基本概念としては、①ホリスティック・ラーニング(Holistic Learning)、②異文化理解(Intercultural Awareness)、③コミュニケーション(Communication)の3つがある。この3つの基本概念を視野に入れながら、生徒および教師は学習を進めていくのである。

また、MYPのカリキュラムの特色として、図3のように8つの教科群と5つの「相互作用のエリア」(The Five Areas of Interaction: 以下、AOIと略記)から構成されている。そのAOIとは、

- ① Approach to Learning (ATL) 「学習の姿勢」
- ② Environment 「環境」
- ③ Health and Social Education 「健康と社会教育」
- ④ Community and Service 「共同体と奉仕」
- ⑤ Human Ingenuity 「人間の創造」

の5つである。

すなわち、8つの教科はAOIを取り囲むように存在しており、AOIと密接な関係を持ちながら他教科とも連携している。さらに、小池(2009, p.3)は、「MYPにおいては教科という枠組みは確かに存在しているが、AOIという領域を常に意識しながら学習することにより教科の枠組みを超えた、広い視野の学習活動を行うことを前提としている」と述べている。

また、MYPはどのような言語でも提供可能である。学習期間は5年と設定されているが、もっと短い期間での学習も可能となっている。そして、最終学年に個別プロジェクト(Personal Project)^{注3)}を取り組むこととなっている。



図3 MYPの基本概念と教科の関係性

出典: 相良ら(2007, p.196)。また、相良らも以下のURLから資料を収集して引用している。

<http://www.ibo.org/myp/slideb.cfm>

5. MYP における体育科

MYP は、「全人教育という観点から、『Art』『Physical Education』といった分野も他の分野と同じ価値を持つ重要な教科として位置づけられている」（原，2002）。

それでは、MYP における重要な教科として位置づけられている体育の内容を『MYP 体育のガイド』（IB，2010）を参考にして、以下に詳述していく。ただし、紙幅の関係上、「目標」と「評価」に限定しながら述べていく。

5.1. MYP の体育科の導入

MYP における体育は、ただスポーツや試合を行うだけではない。主な目的は、「知的なパフォーマー」（intelligent performer）を育成し、バランスの取れた健康的な生き方の重要性を理解させることである。そして、5年間のMYPを通じて、生徒は知識、批判的思考力、反省する技術、責任感、そして対人能力や自発性を伸ばしていく。このことが長期的な健康的な生活につながる選択を促すはずである。

また、体育は身体を通じて学習の独特な視点をもたらす。それは生徒のATL（Approaches to learning; 学習への姿勢）につながり、他教科に活用可能なものとなる。

体育における学習と発達にはIB学習者像にある資質を伸ばし、MYPの基本的な概念であるホリスティック・ラーニング、異文化理解、そしてコミュニケーションと関わる生徒に貢献するものである。

体育のカリキュラムと他のMYPの教科がこれらの原則に従って展開される場合、生徒は以下の機会を与えられる。

- ・身体的、知的、感情的、社会的発達を促す応用可能な様々な技術を養う
- ・他教科を体育の視点から捉える（体で学ぶ、又はその逆も含まれる）
- ・他教科との交流が体育に関連し、ホリスティック・ラーニングにつながることを理解する
- ・自身のものと比べて新しく、異なった、対照的な発想について考え、学習過程において使用する
- ・あらゆる場面で知識、技術、反省についてやり取りする（communicate）能力を養う
- ・知的、身体的、感情的バランスの重要性を理解する
- ・自身の学習や経験に対し周到に配慮する（thoughtful consideration）

教師は実用的であり、身体を通じて学び教えられる授業において上記の全てを達成するよう努める。

また、IBが制作した教員を支援する教材を、本ガイドを参考にして、校内の教育課程を実施する際に利用することができる。

以上の幅広いゴールの到達を支えるために、このガイドはMYP体育における明確な目的と目標、そして最終評価の必要条件に関する詳細を教師と生徒に与えるものである。

5.2. IBの体育における連続性

MYP体育は、IBのPYPを通して生徒が体験してきた学習を基礎とするものである。PYPは、学問単位の探究を通じて知識、概念理解、技術を養う。この個人的、社会的、身体的教育（PSPE）は健康的な生活のための選択ができるよう、個人的、社会的、身体的健康につながる知識、態度、技術の発達を目指している。

また、MYP体育は、人格形成（Human development）の様々な側面（身体的、社会的、個人的、そして感情的）において重要な役割を持つPYPで体験された体育を基礎とすることを狙いとしている。これらの側面は生徒が動き（movement）について学び、動きを通して自信や協調性を身につけるにつれて養われていく。さらに生徒は情報に基づいた選択をするために健康的な生活における身体的活動の役割について理解を深め、個人や地域社会にとって身体的活動の持つ文化的重要性に理解を示す。

5.3. 目的と方針（Aims and objectives）

○目的

MYP科目と個別プロジェクトのねらいは、一般に教師が教える又はすべきこと、そして生徒が経験する又は学ぶべきことを述べている。さらに、それらは学習経験によって生徒がどのように変化させられるべきかを示している。

MYP体育の指導と研究の目的は、生徒にとって以下のことについての発達を促し可能にすることである。

- ・体育の価値、そして健康でバランスの良い生活との関係性に対する理解と（好意的な）評価
- ・健康と幸福の促進への関心
- ・体育の様々な側面と十分関わるための動機づけ
- ・健康（Physical fitness）の最適な水準
- ・方略、言語、非言語、そして文字による効果的なコミュニケーション
- ・例えば学習、練習、洗練、適応、思考、交流など、様々な身体的活動にうまく参加するために必要な

技術と理解

- ・批判的実践家 (Critical performer) であることを含め、体育の全ての側面について批判的に振り返る能力
- ・身体的活動、スポーツ、健康教育に対する国際的視点の理解
- ・参加者として身体的活動の楽しみ、そして生涯を通しての関心

○方針 (Objectives)

MYP 科目の目標と個別学習は、その科目を学ぶための具体的な対象を述べている。そこにはその科目を学んだ結果生徒が到達できるであろうことが定義されている。

これらの目標は体育の評価規準に見られる評価規準と直接的に関連している。

A Use of knowledge (知識の活用)

生徒が達成出来なければならないことは、以下の点である。

- ・文脈に応じて体育の専門用語を使う
- ・身体的活動に関連する概念、戦略、技術、ルールの理解を示し、様々な状況で活用する
- ・健康や様々な状況における重要性につながる様々な決まりに理解を示す
- ・状況を分析し問題を解決することに知識を使う。学生は非実技又は実演 (non-performance, non-playing) 場面で評価されなければならない

B Movement composition (運動の構成)

生徒が達成出来なければならないことは、以下の点である。

- ・特定の美的活動 (Aesthetic activity) の決まりと一致する動きの可能性やバリエーションを探索する
- ・美しい動きを組み立てる
- ・空間、時間、高さ、力、流れ、の概念を考慮に入れながら、美しい連続動作 (sequences) を組み立てるために動きを組み合わせる

この目標を評価するために、生徒は連続動作 (sequences) を行わなければならない

C Performance (パフォーマンス)

生徒が達成出来なければならないことは、以下の点である。

- ・様々な身体活動への積極的参加に必要な技術 (skill) や技能 (technique) を示す
- ・個人と集団の状況両方において戦術、戦略、ルー

ルを応用すること

- ・様々な身体的状況において、運動概念に基づいた連続する動きを行うこと
- 生徒は実技又は実演場面で評価されなければならない

D Social skills and personal engagement (社会的スキルと個人的関与)

生徒が達成出来なければならないことは、以下の点である。

- ・言語、非言語のコミュニケーション形態を含め、効果的にコミュニケーションをとる
- ・他者との関係を強化する態度や方略を示す
- ・自身の或いは他の文化に対する敬意や配慮 (sensitivity) を示す
- ・自身の学習過程に責任を持ち、活動へ従事する姿を示す
- ・自身の到達度に関して批判的に振り返る
- ・学習を促すゴールを設定し、その達成に向けて行動を起こす

○要件 (Requirements)

MYP 体育は、毎年プログラムにおける MYP の必修項目である。体育の特性のため、カリキュラムは主に実践的活動を通して取り組まれる。体育は他の課外活動や校内活動、学校対抗のスポーツ等と同等にされてはならない。訓練を受けた専門の体育教師によって指導されなければならない。集団の規模は慎重に考慮されなければならない。25人を越える集団は大きすぎて不適切と見なされる。MYP 体育の教師は協調し、発展し、仕事の単位を見直すために、当校日の間に予定される会議を行わなければならない。

全ての MYP 体育授業は、以下のことを保証しなければならない

- ・生徒がこのガイドにある目的と目標に一致する計画的学習に従事する
- ・プログラムの最終年度にある最終評価に向け、出版された MYP 体育の評価規準を用いて生徒の活動が評価される
- ・規準準拠評価が1~4年間、このガイドの最終目標と規準から考えられた暫定的な目標と規準を用いて生徒の活動を評価するために使われる (より詳細な情報は、MYP: From principles into practice (August, 2008) の書類の「Assessment」項目参照)
- ・The areas of interaction は体育カリキュラム計

画、指導、学習の中核的要素である

- ・最低でも年に50時間以上の指導期間が体育科目の科目群 (Subject Group) に割り当てられる

○指導時間 (Teaching Hours)

体育授業の必要条件に満たすために必要な指導時間数が与えられることは重要である。科目群 (Subject Group) における毎年の既定の最低指導時間は50時間であるが、実際にIBは、プログラムの5年をかけてプログラムの必要条件を満たすだけでなく、学問間の学びを可能にする持続可能で同時進行 (concurrent) の科目指導を用意するには50時間以上が必要だろうと認識している。

体育の授業は週1回以上行うことを推奨している。学校は生徒が体育の最終目標に到達する機会を与えるために、十分な時間と継続的指導が与えられるよう保証しなければならない。

体育の特質を考慮すると、着替えとシャワーに必要な余計な時間は既定の指導時間に含まれるべきではない。

○指導言語 (Language of Instruction)

体育の指導言語が授業を履修している一部生徒の母語ではない学校では、該当する生徒が不利にならず最終目標に到達する十分な機会を得られるように保証する手段が取られなければならない。その手段には以下のものが含まれる。

- ・教員研修
- ・評価課題の区別
- ・教材言語の修正
- ・生徒の母語における同時進行の援助

5.4. 評価方法

IBが設定した評価規準 (基準) に基づいて、教師が生徒の評価を実施する。IBのプログラム修了証が必要な場合は、外部調査を毎年実施する。

MYPでは、各教科について7段階の評価基準表に基づく評価を義務づけている (MYP, 2011)。

○MYPの体育の評価規準

- 規準 A 知識の活用 (8点満点)
- 規準 B 運動の構成 (6点満点)
- 規準 C 運動の技能 (10点満点)
- 規準 D 社会的スキルと個人的な関与 (8点満点)

例えば、東京学芸大学附属 (2012) のIBの体育科の実践報告では、表1のような体育科の4つの評価規準を設定しており、それぞれの得点が決められてい

る。しかも、表1のように、それぞれの評価規準に対して、上述したような評価基準表が設定されて、授業を実践している。

表1 MYP 体育の評価規準とその内容

規準 A 知識の活用 (8点)
運動やスポーツ・健康に関する知識や原則について、十分に理解し、自らや他者へ活用することができる。運動・スポーツの楽しさや喜びを体得できる。将来のスポーツライフの基礎を学習することができる。また、生活において運動やスポーツ心身にわたる効果や基礎的な事項を理解することができる。
規準 B 運動の構成 (6点満点)
運動やスポーツの特性に応じて、自己やグループの能力に適した課題の解決に対して工夫を凝らして、活動の仕方と考え、実践・応用する能力を身につけることができる。
規準 C 運動の技能 (10点満点)
自己の能力に適した課題の設定・解決を目指して運動を行うとともに、運動の特性に応じた技能の基礎を身につけ、応用することができる。また、個人およびグループのいずれの状況でも戦術等を応用することができる。さらに、自己の体力や生活に応じて健康や体力を高めるための原則を利用して、運動の合理的な実践を行うことができる。
規準 D 社会的スキルと個人的な関与 (8点満点)
他者との運動やスポーツの学びを通じて、公正・協力・責任などの態度を尊重する能力を身につける。また、自己ならびに他者の健康ならびに環境の安全について考えることができる。

出典：第3回東京学芸大学公開研究会紀要, p.178-180

6. 総合的考察

MYP 体育とわが国の体育、とりわけ「目標」と「評価」に限定して比較検討する。

まず「目標」について、MYP 体育においてはガイドブックにもあるように、「人格形成の役割も持つとされている MYP 体育では、ただスポーツを行うだけではなく『知的なパフォーマンス』を育成し、バランスのとれた健康的な生き方の重要性を理解させること」を長期的な目標としている。そして、そのような目標のもと体育を実施することで、健康の獲得だけでなく、参加者として生涯にわたって身体的活動への関心や楽しむ姿勢、集団社会で必要となってくる能力の発達が期待されるとしている。

一方、日本の体育においては、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力、及び健やかな心身を育てることを示した「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」ことを究極的な目標としている

(文部科学省, 2008)。また, 体力の向上や, 体を動かすことで情緒面や知的な発達を促すことや, 集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力や論理的思考力を育成し, それらを実生活, 実社会の中などで活かすことができるようになることを目指したものとされている (文部科学省, 2008)。

以上のように, MYP 体育の「目標」とわが国の体育の「目標」には, ただ単に技能を伸ばすだけでなく, 生涯スポーツへの関与や体育やスポーツを通しての健康づくりといった方向目標に対する類似点が多いと思われる。

次に, 「評価」について, MYP 体育では, A) 知識の活用, B) 運動の構成, C) 運動の技能, D) 社会的スキルと個人的関与, の4つの規準が設けられている。これを日本の体育における評価の4つの評価規準の観点と対比させた関係性を示しているのが図4である。

まず, 「A) 知識の活用」については, 運動やスポーツ・健康に関する知識や原則について理解しそれを活用することとなっている。また, 将来のスポーツライフの基礎を学習し, 心身への効果や基礎的な事項を理解することを規準の内容としている。したがって, これは日本における評価規準の「知識・理解」に相当するものであると考えられる。

次に, 「B) 運動の構成」については, 自己やグループの能力に適した課題解決を考えること, 及び運動を実践・応用する能力を身に付けることが規準の内容となっている。さらに, 「C) 運動の技能」については, 運動技能の基礎を応用すること。さらに, 状況に応じた戦術の応用や, 自己の能力や体力に適した課題設定・解決, 及び様々な原則を活用した合理的な実践を行うことができるとされている。このように, B)とC)の両者の規準は, わが国の「技能」のみではなく, 身体的活動の構成を考えたり, 自己に適した課題の設定や戦術の応用といった内容が含まれていることから, 「思考・判断」の観点も含んでいると思われる。

最後に, 「D) 社会的スキルと個人的関与」については, スポーツを通じて, 構成・協力・責任などの態度を持って他社と関わること。また, 自他の健康ならびに環境の安全について考えることができることが求められている。ここでは, 「関心・意欲・態度」のうちの「態度」, 及び「思考・判断」に相当すると考えられる。

以上のことを踏まえると, IBのMYP体育を日本の学習指導要領の体育と俯瞰して比べてみると, その理念や規準名は, 日本とは一見違うよう思われるが, 内容を検討すれば, 方針や評価の総合的な考え方は類

似している点が多いと思われる。例えば, MYP 体育においては「幸福」や「批判的実践」といった表記は, 日本の学習指導要領に記載されている「明るく豊かな生活」や「運動の合理的な実践」という表現と類似している点である。

さらに, 「評価」に関しても, 「技能」に関する観点が2つあり, 「社会的スキル」といった学習指導要領には明記されていない表現で解説されているが, 前述したように日本の評価規準に類似した概念として捉えることも可能である。したがって, MYP 体育と日本の体育の「目標」や「評価」に関しては, 類似した点が多いと思われる。

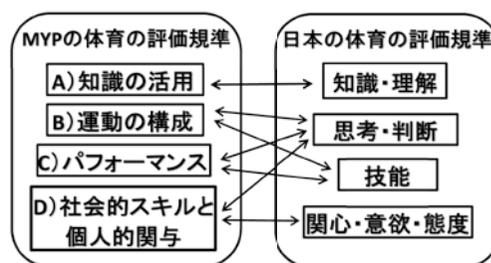


図4 MYP 体育とわが国の体育の評価規準の対応

7. おわりに

グローバル化に対応した人材育成が求められる中, 子どもたちの意識を変えることはもちろんのこと, 教員自身あるいは教員を養成する大学にもグローバルなものの見方や考え方を身に付ける必要性がある。その点について, 以下のように中教審答申 (2012) で指摘している。

「例えば, 教職課程を置く大学において, 教職課程の質の維持・向上を図りつつ, 要件を満たせば学生が海外に留学した際に取得した単位を教職課程に係る単位として認めていくことなどにより, 教員を志望する学生の海外留学を促進していく必要がある」(中教審答申, 2012, p.25)

一方, わが国の学校にIBを導入する際の障壁や課題としては, 以下のことが考えられる。

- 1) 日本の学習指導要領 (カリキュラム) との整合性
- 2) 学習評価の整合性と複雑性
- 3) 経費の問題・教員の確保

1) については, 上記でも述べたように, MYP 体育の「目標」と「評価」には共通かつ類似する部分が多い。しかしながら, 実際にMYP 体育の内容を日本の学習指導要領の枠組みで実施するには, カリキュ

ラム上の整合性を持たせなければならない。

2) については、MYP 体育と日本の評価規準に対する最終的な評定の方法についてである。その点について、星野 (2010) は「両者の 2 本立てで評価をせざるえない状況が学校の授業計画を複雑化している」と指摘しており、MYP の認定のための評定と日本の成績づけの評定の両方を現状ではしなければならず、教師たちへの負担が懸念される。そのため、日本の評価規準である 4 つの観点 (関心・意欲・態度、思考・判断、技能、知識・理解) と IB の学力観との整合性から評価をどのように簡素化しつつ、妥当性を保証するのかが課題として挙がる。

3) については、実際に IB の認定を受けるまでには、コーディネーターが中心となって、各教科の教員は海外での研修に参加しなければならない。しかも、そのような IB 認定に係るスタッフの人件費や認定経費など、多くの経費が必要不可欠である。この点についても、IB を導入する際の大きな課題となるであろう。

なお、今日までの学校体育には、地域スポーツの発展等に伴い、欧米のある地域では学校体育の廃止あるいは大幅な時間数の削減などの体育科の存在意義を揺るがす時期もあったのが現実である。そのような中、この IB の体育の位置づけは、人格形成の教育における非常期に重要な教科の 1 つとみなされている。したがって、わが国における体育科の存在基盤の議論同様に、この報告を通して、体育科の存在意義に対する 1 つの示唆になることを期待する。

【注】

1) グローバル人材とは、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間であり、このような人材を育てるための教育が一層必要となっている」(文部科学省, 2011)。

2) DP については、以下のその概略について詳述するが、さらなる詳細については、文部科学省の HP にある以下の URL か、相良ら (2007) あるいは田口 (2007) の文献を参照されたい。

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1308000.htm

DP (Diploma Programme) は、16歳～19歳までを対象としており、合格すると、世界各国で認めら

れている大学入学資格を得られる最終試験があるプログラムである。ディプロマ資格を取得するためには、上級レベル又は標準レベルとして、グループ 1 からグループ 5 までの科目を各々 1 つずつ選択し、さらにグループ 6 から芸術又はグループ 1 からグループ 5 の中からもう 1 科目選んで合計 6 科目を 2 年間履修する。

グループ 1 が 第 1 言語 (母語)、グループ 2 が 第 2 言語 (外国語)、グループ 3 が個人と社会、グループ 4 が実験科学、グループ 5 が数学とコンピュータ科学、グループ 6 が芸術又は選択科目である。

それに加え、ディプロマ資格の取得のためには以下の 3 つの要件を満たす必要がある。

・ Extended Essay (EE : 課題論文)

生徒が学んでいる科目に関連した研究課題を決めて、自分で調査・研究を行い、学術論文にまとめる。

・ Theory of Knowledge (TOK : 知識の理論)

学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養う。さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めて、偏見や偏狭な考え方をただし、論理的思考力を育成する。

・ Creativity/Activity/Service (CAS : 創造性・活動・奉仕)

教室を出て広い社会で経験を積み、いろいろな人と共同作業することにより協調性、思いやり、実践の大切さを学ぶ。

DP は、授業、試験ともに英語、フランス語、スペイン語のいずれかで行われるのが基本である (一部では、試験的に中国語とドイツ語でも行われている)。

3) 個別プロジェクト (personal project) とは、個別学習に類似する概念で、一人で課題を見つけて最終的にレポートを提出することである。

4) MYP 体育のガイダンスによると、DP に体育の位置づけの変更を以下のように記している。

「DP における 2 つのパイロット授業が技術、知識、体育分野における理解の促進を続けている。それはグループ 4 のスポーツ、運動、健康科学とグループ 6 のダンスである。スポーツ、運動、健康科学の DP 授業は生徒に科学原則を応用し、人間の performance を批判的に分析するために必要な知識と理解を習得させる。それはグローバルな状況や周囲との関係性においてスポーツ、運動、健康を考えることによって、国際的意識や倫理的価値観の問題に対応している。ダンスの DP 授業は芸術的、美的、

そして文化的教育に重要な要素であり、身体的、非言語的表現を通じて創造的な可能性を伸ばしている。ダンスでは、体、知性(mind)、そして精神(spirit)の統合が他教科に応用可能で、日常生活に関連した技術の習得を可能にしている。」

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申). 平成24年 8月28日. 文部科学省
- 星野あゆみ (2010) 東京学芸大学附属国際中等教育学校と国際バカロレア機構 中等課程プログラム. 国際中等教育研究, 3: 1-5
- 星野あゆみ (2011) IB ワールド・スクール認定までの道のり. 国際中等教育研究, 4: 1-9
- 原和久 (2002) IB の教育理念と Middle Year Programme の内容と特徴についての一考察. 千里国際学園中等部・高等部研究紀要, 7: 89
- IB (2010) Physical education guide. Middle Years Programme.
- ジョーンズ・ジェフリー・アポストル・ポール・星野あゆみ (2011) 今日の学習評価における優良実践 国際バカロレア機構中等課程プログラムはどこまで対応しているのか. 国際中等教育研究, 4: 11-29
- 小池研二 (2009) 国際バカロレア中等教育課程 (MYP) 芸術科についての基礎的研究. 美術科教育学会誌, 30: 191-200
- 文部科学省 (2012) 国際バカロレアについて. http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm
- 文部科学省 (2011) 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略. 産学連携によるグローバル人材育成推進会議. 平成23年 4月28日
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領保健体育編 毎日新聞(2012)国際バカロレア「200校に」. 2012. 6.19 夕刊
- 相良憲昭・岩崎久美子 (2007) 国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム. 明石書店
- 田口雅子 (2007) 国際バカロレア 世界トップ教育への切符. 松柏社
- 東京学芸大学附属 (2012) 第3回東京学芸大学公開研究会紀要, p.178-180